

保育者養成校に求められる学生の保育実践能力と 資質について

林 悠子・森本美佐

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

The Required Aptitudes for Students in Childcare Program

Yuko Hayashi・Misa Morimoto

Naragakuen University Narabunka Women's College

本研究では、近畿一円の保育所・幼稚園に対するアンケート調査から、保育者に求められる保育実践能力と保育者としての資質、そして短期大学卒業者と4年制大学卒業者の入職時の専門的実践能力の習得状況について比較を試みた。

その結果、現場で望まれる保育実践能力はほとんどが保育所よりも幼稚園の方が高く、「ピアノ技術」や「子どもの特性や個性に合わせて保育を展開する能力」などで差がみられた。幼稚園ではピアノや絵本の読み聞かせなどの技術が、保育所では生活援助や保健衛生の技術が望まれるなど、保育所と幼稚園では望まれる実践能力に違いがあることが明らかとなった。一方で、望まれる保育者としての資質にはほとんど差が見られず、保育所・幼稚園ともに共通した「保育者像」があることが推測された。また、短期大学卒業者と4年制大学卒業者では、入職時の専門的実践能力はすべての項目で4年制大学卒業者のほうが高得点を示し、特に技術の応用や展開力などで差がみられた。

キーワード：保育者養成、保育実践能力、保育者資質

1. はじめに

これまで、短期大学における保育者養成の在り方を検討する目的で調査を実施してきた。一昨年には本学卒業生の就職先の保育所長・幼稚園長・施設長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。その結果、保育現場ではまず保育者としての「技術や知識」、「資質」が求められ、同時に社会人としての力や保育者として働く高い意識が求められること、本学卒業生については、それぞれの持つ資質や人柄、働く姿勢は評価されているものの、「保育技術」に対する評価は十分ではないことが明らかとなった¹⁾。さらに、昨年には新人保育者の早期離職に関して実態調査を行ったところ、早期離職の根本的な原因は人間関係にあったが、現場からは「卒業時と現場で求める実践能力のギャップも一因ではないか」という意見も多く挙がっており²⁾、保育者は卒業時にはどのよ

うな実践能力を備えているべきか、検討する必要があると改めて感じられた。

近年の子育て環境の変化に際し、保育者養成機関に対しても質の高い保育者の育成が望まれている。認定こども園の制度の改正や変更に伴い、保育所と幼稚園どちらかというこれまでとは異なり、より幅広い知識や技術の獲得がますます必要になってくる。大学の編成としても、短期大学から4年制大学化へと改編する動きや、これまで幼稚園免許の取得のみが可能であった4年制大学の幼児教育学科において保育士資格の取得が可能になる保育士養成課程の新設などの動きも見られている。幼稚園免許と保育士資格の両方を得て、高い意識を持って専門職に就く学生もいれば、入学の間口が広がったことに伴い、保育や幼児教育への意識の低いまま入学し、十分に知識や意欲を高められないまま「なんとなく」専門職に就いてしまう学生がいるのも現状である。これについては多くの養成校の今日的課題であり、さまざまな調査研究がなされている。

本研究では、「現場で求められている能力と新入職者が有している能力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課程による差を探求し、短期大学における課題を明らかにすることで、本学のなすべきことを再考していくこととした。

2. 目的

本研究は、幼稚園や保育所に対して行ったアンケート調査を分析することにより、保育現場が求める保育者の資質や保育実践能力を明らかにするとともに、短期大学卒業の新入職者と4年制大学卒業の新入職者の保育実践能力の習得状況を明らかにすることで、短期大学としての本学が学生に対して何を身につけさせるべきか、その求められる役割について再考することを目的とした。

3. 方法

3.1 調査時期

アンケート調査の実施期間は20XX年5月～10月であった。

3.2 調査内容

保育の専門能力は、文部科学省委託事業「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」成果報告書³⁾で提示された項目をベースに、『専門的実践能力』20項目、『保育者としての資質』20項目を挙げた。それぞれに対して「一人でできる実践力が必要、又は大変重視する」(5)から「全く必要ない、又は重視しない」(1)までの5段階尺度で回答を得た。

また、短期大学や4年制大学を卒業した新入職者1名を想定し、同項目を用いて、それぞれの入職時における実践能力や資質がどうであったかについて、「一人で実践できる」(5)から「指導しても実践できない」(1)までの5段階尺度で回答を得た。

3.3 調査対象と回答の属性

郵送によるアンケート調査を実施した。調査対象は、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理者、または新人教育担当者であり、近畿の各府県の幼稚園、保育所数がほぼ均等になるように選出し、依頼総数は450施設であった。そのうち152施設から回答が得られた（回収率33.8%）。回答者の内訳は幼稚園76施設、保育所74施設、その他2施設であった。新卒者の雇用状況は、4年制大学卒業者の雇用があった施設101、短期大学卒業者の雇用があった施設146、無記入6施設であった。

3.4 分析の方法

各項目に対する「一人でできる実践力が必要、又は大変重視する」または「一人で実践できる」(5)から「全く必要ない、又は重視しない」または「指導しても実践できない」(1)までの5段階尺度による回答について、所属種別または教職課程別で順位和検定を行った。

3.5 倫理的配慮

調査用紙とともに、調査の趣旨や、回答は自由であること等を文書にて説明して調査への協力を依頼し、回収を持って同意を得たものとした。

4. 結果

4.1 保育現場が新入職者に望む保育実践能力

図1は、現場が新入職者に望む保育実践能力の平均値を回答者の所属園別に表したものである。幼稚園では「ピアノ技術」(3.97)、「子どもの特性や個性に合わせた保育展開能力」(3.93)、「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」(3.91)、「環境にあわせた保育展開能力」(3.81)の順に高く、保育所では「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」(3.85)、「絵本の読み聞かせなどの表現力」(3.68)、「自然と触れあう力や敏感さ」(3.75)、「生活援助・養護の技術」(3.63)で高かった。両者ともに、「食育に関する指導力」(幼稚園(以下、幼):3.35、保育所(以下、保):3.32)や「研究や情報処理能力」(幼:3.36、保:3.32)についてはやや低かった。

ほとんどの項目で幼稚園が保育所に比べて高かったが、両者を比較した結果、「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」(幼:3.65、保:3.35、 $p=0.033$)、「制作指導力」(幼:3.69、保:3.38、 $p=0.028$)「ピアノ技術」(幼:3.97、保:3.59、 $p=0.019$)、「子どもの特性や個性に合わせて保育を展開する能力」(幼:3.93、保:3.59、 $p=0.014$)では5%水準で、「絵画造形能力」(幼:3.57、保:3.15、 $p=0.002$)、「運動能力」(幼:3.51、保:3.15、 $p=0.006$)、「運動遊びを展開する能力」(幼:3.73、保:3.28、 $p=0.001$)、では1%水準で有意な差が認められた。

4.2 保育現場が新入職者に望む保育者の資質

図2は、現場が新入職者に望む資質の平均値を回答者の所属園別に表したものである。幼稚園・保育

所ともにほぼ似たような傾向を示しており、両者を比較した結果、いずれの項目においても有意な差は認められなかった。また、ほとんどの項目で実践能力に比べ平均値が高く、とりわけ、「子どもに対する思いやりの心」(幼：4.56、保：4.45)、「子どもに対する信頼と責任感」(幼：4.53、保：4.46)、「社会人としての自覚を持って仕事に臨む力」(幼：4.4、保：4.55)、「人との約束を守る力」(幼：4.44、保：4.48)などが高かった。

4.3 新入職者の保育実践能力の習得状況

図3は、短期大学卒と4年制大学卒の新入職者の保育実践能力の習得状況の平均値を教職課程別に表したものである。すべての項目において4年制大学卒業生の方が高い値を示した。両者を比較した結果、「運動遊びを展開する能力」(短期大学卒(以下、短)：3.21、4年制大学卒(以下、四)：3.47、 $p=0.021$)、「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」(短：3.16、四：3.41、 $p=0.033$)、「制作指導力」(短：3.21、四：3.46、 $p=0.025$)、「保健衛生や安全についての技術」(短：3.08、四：3.30、 $p=0.037$)、「保健衛生や安全に関する指導力」(短：3.04、四：3.29、 $p=0.022$)、「園便りなどの文章力や言語能力」(短：3.20、四：3.45、 $p=0.022$)、「環境にあわせた保育展開能力」(短：3.02、四：3.25、 $p=0.035$)、「子どもの特性や個性に合わせた保育展開能力」(短：2.96、四：3.23、 $p=0.018$)、「特別支援や障害児保育に関する技術」(短：2.81、四：3.05、 $p=0.036$)では5%水準で、「行事などの企画力」(短：2.88、四：3.25、 $p=0.001$)、「指導案などの立案能力」(短：3.08、四：3.40、 $p=0.006$)、「保護者への対応力」(短：3.00、四：3.22、 $p=0.006$)、「研究や情報処理能力」(短：2.92、四：3.29、 $p=0.002$)では1%水準で有意な差が認められた。

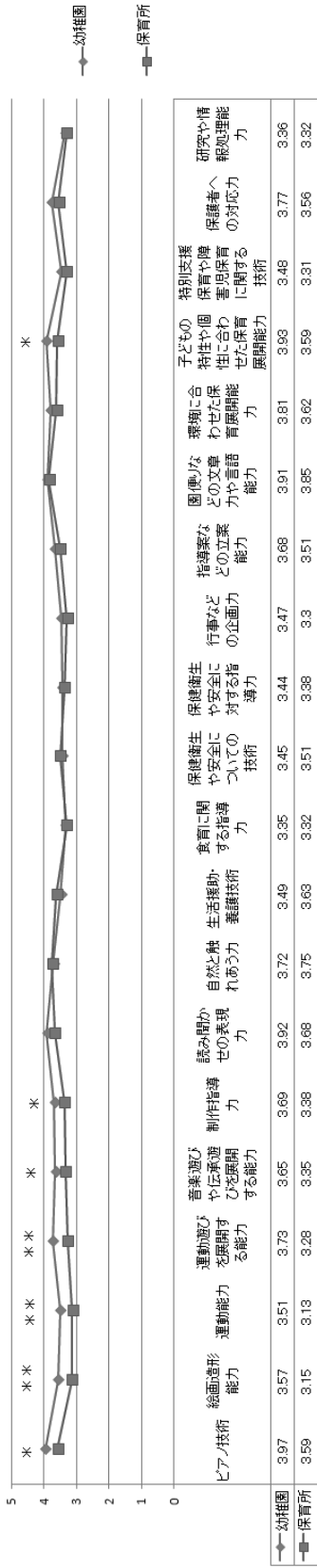


図1 所属園別にみた新入職者に望む保育実践能力, N=150 (*p<.05 **p<.01)

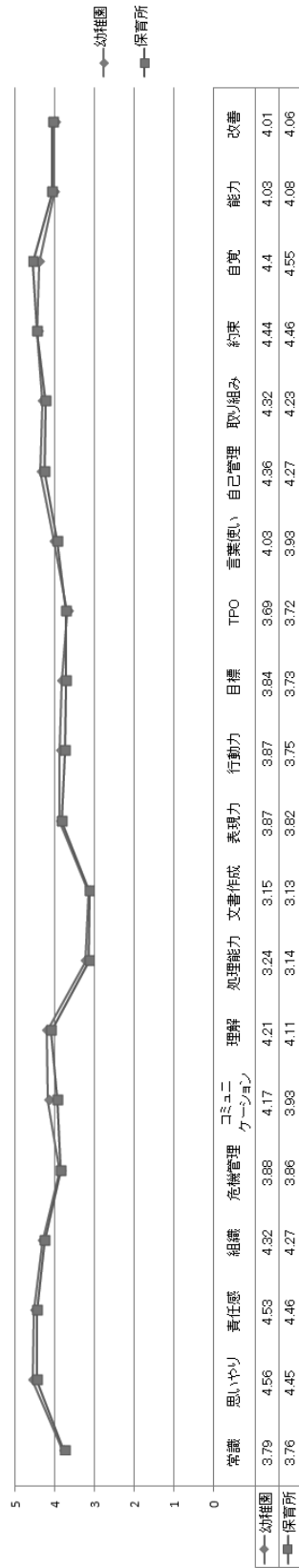


図2 所属園別にみた新入職者に望む保育者としての資質, N=150

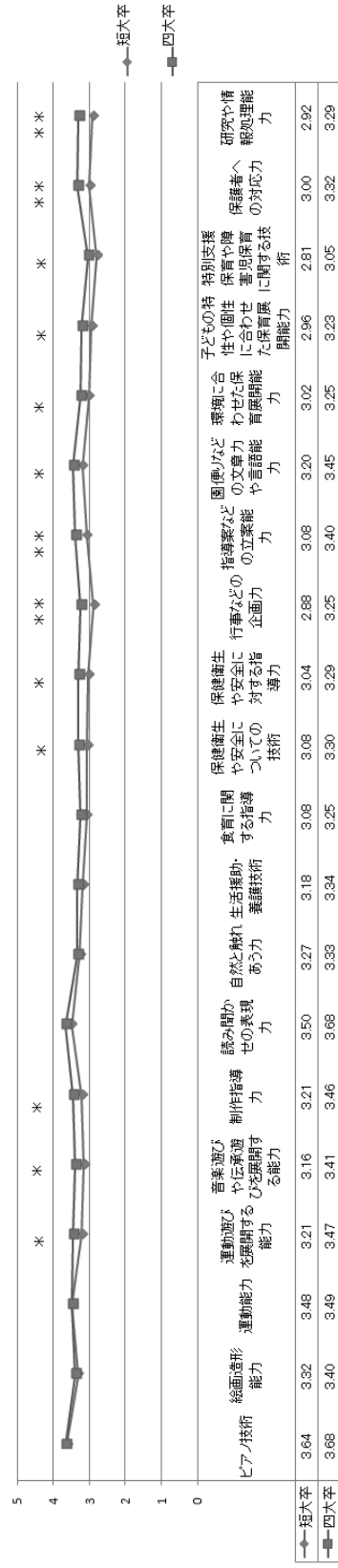


図3 教職課程別にみた新入職者の保育実践能力の習得状況, N=146 (*p<.05 **p<.01)

5. 考察

本研究では、保育現場がどのような保育者の資質や保育実践能力を求めているのか、また、短期大学卒業の新入職者と4年制大学卒業の新入職者では保育実践能力にどのような差があるのかを、幼稚園や保育所の所属長に対して行ったアンケート調査により分析を試みた。

保育現場が新入職者に望む保育実践能力については、ほとんどの項目で幼稚園が保育所に比べて高く、特に「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」「制作指導力」「ピアノ技術」「子どもの特性や個性に合わせて保育を展開する能力」「絵画造形能力」「運動能力」「運動遊びを展開する能力」に差がみられた。共通して重視されていたものは「連絡帳や園便りなどの文章力や言語能力」であり、「食育に関する指導力」「研究や情報処理能力」については、ともにやや重要度が低かった。また、所属園別にみると、幼稚園では「ピアノ技術」「子どもの特性や個性に合わせた保育展開能力」「環境にあわせた保育展開能力」、保育所では「絵本の読み聞かせなどの表現力」「自然と触れあう力や敏感さ」「生活援助・養護の技術」で高かった。先行研究¹⁾での保育者として必要なことについての自由記述の分析においても、「ピアノの技術」や「応用力」「立案力」「文章力・漢字」等の実践力についての回答が多かったが、本調査においてもほぼ同様の結果が得られた。特に幼稚園には保育所よりも高い実践力が求められているが、ピアノ技術や運動能力や造形能力などの基礎的な技術の習得に留まらず、それらを用いて子どもや環境に合わせた発展的な遊びや保育を展開する能力が必要とされることがうかがわれた。ほぼすべての項目で幼稚園のポイントが高い中、「自然と触れあう力や敏感さ」「生活援助・養護の技術」においては保育所の方が高く、技術とともにより高い感性を重視する面や養護的な特性を捉えた面で幼稚園と異なっていた。共通した「文章力や言語能力」については、保育現場では毎日の日誌や保護者へのお知らせや園便り等、常に必要とされるものであるが、携帯電話やパソコンなどのツールの発達とともに新聞や本からの活字離れも指摘され、これらの力の低下については危惧されている。松崎⁴⁾は、文章力や言語能力も含めた「国語力」について、基本的な文章表現力がままならない学生や、対象に応じた話し方が不十分な学生、主体的なコミュニケーションを苦手とする学生の問題点を指摘している。さらに、これらの問題点は実習現場等で指摘され、その後も養成校において習得する機会があるが、連絡帳やクラスだよりの書き方や実際の保護者とのやり取りなどは養成校での学習場面がほとんどないとしている。中平⁵⁾らも、保育士は日常的に文字を書くことが多く、文章表現をする対象も様々であり、文章力を必要とする機会が多いが、養成校学生の文章力について問題視している。本学学生においても、やはり同様の問題は散見され、入学前教育や「国語表現法」「ソーシャルスキル演習」等の科目において学生の学習機会を高めているが、基礎学力としての国語とその応用力としての国語力、書くことだけではなく話すことなど幅広く能力を高めねばならない。先述した授業科目だけでなくすべての科目においても、今よりさらに国語力向上を意識して授業を行うなど、様々な手立てを考える必要がある。

保育現場が新入職者に望む資質については、幼稚園・保育所ともにほぼ似たような傾向を示しており、所属園別に差はなかった。また、ほとんどの項目で実践能力に比べて高く、実践能力よりも資質に対する重要度が高いことがうかがわれた。とりわけ、「子どもに対する思いやりの心」「子どもに対する信頼

と責任感」「社会人としての自覚を持って仕事に臨む力」「人との約束を守る力」などが高かった。先行研究¹⁾においても保育者として必要とされることとして「豊かな人間性」「責任感」「マナー・礼儀作法」などの回答が多くみられていた。技術や専門能力の習得はもちろんであるが、保育者としての人間性や資質、また社会人としてのマナーや心構えを備えていることが大前提であると思われ、保育者採用の一番のポイントは技術よりも人柄やその個人の魅力、熱意であるとする現場の声もある^{6) 7)}。保育者（保育士養成校学生）の資質の低下もいわれているが、本人の持って生まれた資質をうまく育てながら、保育に対する姿勢や保育者としての責任感、社会人としての仕事への意識、子どもだけではなく様々な人への接し方や向き合い方、こうしたことについて養成校がいかに育てていくのか、その臨み方が問われるであろう。

短期大学卒と4年制大学卒の新入職者の保育実践能力の習得状況については、すべての項目において4年制大学卒業生の方が高い値を示した。特に、「運動遊びを展開する能力」「音楽遊びや伝承遊びを展開する能力」「制作指導力」「保健衛生や安全についての技術」「保健衛生や安全に関する指導力」「園便りなどの文章力や言語能力」「環境にあわせた保育展開能力」「子どもの特性や個性に合わせた保育展開能力」「特別支援や障害児保育に関する技術」「行事などの企画力」「指導案などの立案能力」「保護者への対応力」「研究や情報処理能力」では差が認められ、「企画力」「立案能力」などは特に差が大きい。やはり、さらに2年間の学習を上積みできる4年制大学卒の方が短期大学卒に比べてより幅広く高い実践能力を有して就職していることが示された。2年では実習期間が短く、現場体験が少ないことから知識と技術が身につけにくいのは明らかであり、短期大学で4年制大学と同等の力を求めるのは無理がある。秋田⁸⁾は、4年制大学卒の保育士は子どもの対応がきめ細かく子どもの発達を促す適切な言葉かけができるとしている。また、中平⁵⁾は、養成期間を延長することで現場体験が増え、子ども理解が深まるとの考えから、保育現場における短期大学の4年制大学化への賛成意見も推察している。これらのことは養成校のあり方にも直結することであり、この現実を踏まえ、本学を含めた短期大学の養成校においては、短期大学生が卒業時に達成できる力を見極めて、確実に身につけさせていかねばならない。高い知識や技術をすべて、能力の差がある学生に身につけさせようとするのではなく、まずは保育者としての姿勢を理解させ、文章・言語能力の基礎を身につけさせることが求められている。少しずつ現場とのギャップを埋めるよう努力し、その上で、学生個々の進路を踏まえながら、社会人としてどのように生きるべきかキャリア教育を行っていくことが必要となる。また、塘⁹⁾が、今後は幼保一体化の流れの中で、乳児・幼児といった年齢区分ではなく、0～6歳までの就学前の子どもの発達を連続的に考えることができる幅広い知識と、保護者や地域の人々と連携できる高いコミュニケーション能力の養成がより大事になるであろうと述べているように、様々な制度の変革や社会のニーズにより一層応えていくことが養成校には必要になると考える。本学においても、2年間もしくは3年間（本学の長期履修制度による）で、学生が高い意識と目標を持ち、自ら能力を高めて社会に出られるよう、学生との距離の近さや少人数制授業といった本学の良さを活かしながら、教職員もまた高い問題意識を持って実践能力と資質の向上に取り組まねば、質の高い教育の保証にはならないであろう。

6. まとめ

本研究では、保育現場がどのような保育者の資質や保育実践能力を求めているのか、また、短期大学卒業の新入職者と4年制大学卒業の新入職者では保育実践能力にどのような差があるのかを、幼稚園や保育所の所属長に対して行ったアンケート調査により分析を試みた。その結果、保育実践能力として「文章力」や「保育の展開能力」が求められ、幼稚園の方が保育所に比べてそれぞれの実践能力に対する要求が高いことが明らかとなった。求める保育者の資質はほぼ共通しており、「思いやり」や「信頼と責任感」などが高く、また実践能力よりも資質に対する重要度が高いことがうかがわれた。新入職者においては、すべての項目において4年制大学卒業生の方が高い値を示し、特に、「企画力」「立案能力」「保護者対応」「研究や情報処理能力」で差が認められた。今後は、現場が重要であるとする実践能力や資質と、学生が重要であるとするそれとに違いがあるのかを調査しながら、本学の考える保育者に必要な実践能力や資質は何かを明らかにしていきたいと考える。

7. 謝辞

お忙しい中、本研究の調査にご協力頂いた幼稚園、保育所の園長ならびに施設長先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 林悠子・森本美佐・東村知子(2012) 保育者養成校に求められる学生の資質についてー保育現場へのアンケート調査よりー. 奈良文化女子短期大学紀要, 43 : 127-134.
- 2) 森本美佐・林悠子・東村知子(2013) 新人保育者の早期離職に関する実態調査. 奈良文化女子短期大学紀要, 44 : 101-110.
- 3) 佐藤弘毅他(2011) 短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究成果報告書
- 4) 松崎史周(2013) 保育者養成短期大学における国語力育成のあり方. 清泉女学院短期大学研究紀要, 31 : 1-11.
- 5) 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之(2013) 保育所保育における保育士の資質の問題点と課題. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 3 : 52-60.
- 6) 高山千代・小黒美智子・伊藤民子(2010) 保育者養成校に対する保育現場の期待ー新潟県内幼稚園および保育所へのアンケート調査をもとにー. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 40 : 53-65.
- 7) 浅見均(2000) 保育者の資質に関する一考察 : 保育現場から見た保育者の資質. 青山学院女子短期大学紀要54 : 121-150
- 8) 秋田喜代美・佐川早季子(2011) 保育の質に関する縦断研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51 : 217-234.
- 9) 塘利枝子(2010) 日本における幼児教育・保育と保育者の人材育成. 幼児教保研究期刊, 5 : 57-64.